

択滅無為の粗大消滅的解釈の展開

著者	志田 泰盛
雑誌名	哲学・思想論叢
号	34
ページ	48(33)-31(50)
発行年	2016-01
その他のタイトル	On the transmission of the interpretation of pratisamkhyanirodha (suppression due to discernment) as sthulavinasa (coarse destruction)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144571

損滅無為の粗大消滅的解釈の展開*

志 田 泰 盛

1. はじめに

初期仏教以来、〈無為〉(*asaṃskṛta*)とは涅槃の代表的異名であったが、後に因果プロセスに関わらない存在一般が〈無為法〉と呼ばれる集合の要素として数え上げられていく過程で、涅槃の異名としての無為は〈損滅〉(*pratisaṃkhyānirodha*)という術語で指示されることもある。また仏教内の諸学派の間で「無為法は何種類か」「各無為法は実有(*dravyasat*)か」という論点を中心に多くの議論が派生するが、虚空や〈非損滅〉(*apratisaṃkhyānirodha*)などの他の無為法から〈損滅〉が区別される点については、仏教諸学派の間で概ねのコンセンサスが確認できる⁽¹⁾。

一方で〈損滅〉について、涅槃の異名とする仏教に一般的な理解を逸脱した解釈も確認される。それは例えば「壺の破壊」や「槌による破壊」など物理的原因に基づく観察可能な消滅を〈損滅〉とする見解である。仏教の伝統的教説の誤解とも言えるこの解釈は、バラモン教側の諸文献の他、仏教側の文献でもバラモン教学派による仏教説理解として報告されている。本稿は、物理起因的な破壊を〈損滅〉に同定ないし包含させるこの見解の起源と流布の背景を検討するものである。

この点に関して、「壺の破壊」あるいは物理的衝突を解脱や悟りと関連させる表現は古くからいくつかの文脈で散見される。例えば『成実論』では涅槃が実有でないことを説明する文脈で「瓶の破壊」や「樹の切断」が涅槃に譬えられている⁽²⁾。あるいは、インド撰述ではないが瓦礫と竹の衝突〔音〕が頓悟の機縁になるという用例も確認される⁽³⁾。そこで本稿では、譬喩表現でもなく、また頓悟の機縁としての現象でもなく、直接的な表現として物理起因的な「壺の破壊」や「槌による破壊」等の実例を〈損滅〉として明言する文献を対象を絞り、この解釈の伝承を跡付けたい。

結論を先取りすれば、この解釈の背景にある一つの要因として、2種類の消滅の区分の混同が推察される。2種の区分とは、まず〈知を前提とする消滅〉と〈知ならざるものを前提とする消滅⁽⁴⁾〉という区分であり、もう一つは〈観察可能な粗大な消滅〉と〈観察不可能な微細な消滅〉という区分である。こ

の2種の区分は、ミーマーンサー学派の Kumārila の著作の中、「消滅一般はそれ自体消滅することなく永遠である」という見解を仏教説として説明する一連の文脈で言及されており、この箇所を参照したであろう後代の思想家が〈択滅〉を粗大消滅とする新解釈を明言していくことが確認される。

1. 1. 択滅の仏教的解釈とバラモン教的新解釈の一例

議論の見通しをよくするため、〈択滅〉について仏教において一般的な規定とバラモン教的新解釈の一例を参照したい。まず仏教的解釈の一例として『俱舍論』(*Abhidharmakośabhāṣya* I vv. 5-6) が挙げられる。『俱舍論』では無為法として択滅・非択滅・虚空の3種が数えられ、択滅については「拘束を離れること / 離繫 (*viśamyoga*)」と規定され、さらに以下の説明が与えられている。

有漏の諸法からの拘束を離れることがすなわち択滅である。択とは苦などの〔四〕聖諦を〔正しく〕弁別することであって、すなわちすぐれた慧にはかならない。そ〔の択〕によって得られるべき滅が択滅である。⁽⁵⁾
(櫻部 [1969: 143,6-7])

ちなみに非択滅について『俱舍論』は「未来の諸法の生起が完全に妨げられた状態の消滅」と説明する⁽⁶⁾。

一方でバラモン教側では、〈択滅〉を観察可能な〈粗大消滅〉と解釈する例が Rāmānuja (11-12 世紀) の *Śrībhāṣya* (BSRBh) に確認されている⁽⁷⁾。

刹那滅論者たちは、(A) 槌の打撃などの直後に起こるものとして知覚可能であり、同質の連続体の終端というあり方を持つ粗大な〔消滅〕、及び、(B) 同質の連続体において各瞬間に存在し、知覚不可能で微細で非継続的な (*niranvaya*) 消滅⁽⁸⁾を〔それぞれ〕「択滅」「非択滅」という語で指示するが、その両者があり得ないという意味である。⁽⁹⁾

このように刹那滅的世界観の枠組みの元で、(A) 槌による壺の破壊のような観察可能な〈粗大消滅〉、及び (B) 瞬間毎の〈相続〉すなわち連続的な自身のレプリカ生成に必然的に伴う〈微細消滅〉を、それぞれ「択滅」「非択滅」と見なす見解が紹介されるが、これは仏教内部において一般的な理解、少なくとも『俱舍論』の規定から大きく逸脱するものである。

Rāmānuja に類似する解釈は Sucaritamīśra や Kamalaśīla の著作にも確認される。そこで、次節では彼らが参照したはずの Kumārila の *Ślokaivārttika* (ŚV) の議論に焦点を当て、ŚV の言明がこの解釈の起点になり得るか、あるいはすでに Kumārila がこの解釈をとっていたかを検討する。

2. Kumārila の択減理解

2.1. 議論のあらすじ

ミーマーンサー学派の根本テキストである *Jaiminīsūtra* (JS) の音声〔常住性〕論題 (JS 1.1.6-23) の前半は、まず想定対論として音声の無常性を示す推論式を列挙し (JS 1.1.6-11)、次いでそれらの論証因が不定因であることを順次示す (JS 1.1.12-17) という構成をとる⁽¹⁰⁾。JS 1.1.6 において「その時 (= 発声等の努力直後) に観察されるから (*tatra darśanāt*)」と音声の無常性に対する理由が挙げられ、JS 1.1.12 がこの想定対論への回答に相当する。

ŚV の音声論題章 (*śabdādhikaraṇa*, ŚVŚNA) は JS 1.1.6-23 に対する複註であり 444 詩節で構成される。そのうち vv. 19-33b が JS 1.1.12 への複註に相当し、JS 1.1.6 で提示された理由が不定の過誤にあることが説明され、仏教徒にとっては 3 種の無為法が逸脱例になる点が指摘される。この箇所について、附論と思しき v. 32c-33b を除く vv. 19-32b について、その内容から 3 つに節を区切って以下和訳を提示する。

2.2. ŚVŚNA vv. 19-32b 和訳

(A) vv. 19a-24b.⁽¹¹⁾

まず、ここ (= ŚBh 1.1.12ff.) において、[JS 1.1.6-11 で示された音声の無常性に対する] 諸々の証因が不定であることが述べられる。

〈努力直後の観察〉は、永遠なものに関しても相容れないわけではない。したがって、〈その時 (= 努力直後) にのみ観察されること〉に基づいて、[むしろ] その他の時における未観察なものが想定される。

もしも 〈[努力一般の] 前にも後にも観察されないこと〉が [音声の無常性の] 証因として意図されているとするならば、ヴァイシェーシカにとっては普遍により、サーンキヤにとっては個我上の純粹精神により、一方で仏教徒にとっては刹那的でない択減・非択減・虚空という 3 種により不定となる。

というのも、彼ら (= 仏教徒) にとって、〈知を前提とする消滅〉に対して「択減」であるとの理解があり、〈知でないものを前提とする消滅〉

は「非択」によるものである。そして、この両者（＝択滅・非択滅）とも、〈消滅しないもの〉(*anāśin*) なので、〈作られていないもの〉(*akṛta*) としても認められるからである。というのも、彼ら（＝仏教徒）は「自性として成立する消滅は原因を持たない」と述べているからである。

(B) vv. 24c–30b.⁽¹²⁾

芽などのように原因を持つものには消滅も観察されるが、その一方で消滅〔自体〕の消滅はない。したがって〔消滅は〕作られたものではない。なぜならば、火との結合に基づいて、木片からは〔消滅ではなく〕炭への相続があり、また槌の打撃に基づいて、壺からは〔消滅ではなく〕欠片が生じるからである。

そうではなくて、本来的な消滅は生じたもの一般に備わっているのである。〔まず〕微細な〔消滅〕は、同質の連続体に付随しているので、観察されることはない。〔一方〕異質な原因（e.g. 火との結合・槌の打撃）が同質の連続体（e.g. 木片・壺）にやって来た場合、異質な結果（e.g. 炭・欠片）によって粗大な〔消滅が〕顕現させられる。

したがって、異質な連続体（e.g. 炭・欠片）が何らかの原因（＝異質な原因，e.g. 火との結合・槌の打撃）によって生み出されており、消滅は他ならぬそれ（＝異質な原因）によって作られているわけではないが、明瞭に顕現させられている。槌の打撃などの努力の直後のものとして観察されているそれ（＝粗大消滅）は作られたものではないので、〔〈努力直後の観察〉という〕証因は〔無常性を〕逸脱する。

(C) vv. 30c–32b.⁽¹³⁾

土や水に覆われた虚空もまた常住であるが、掘削や噴出などによるそれ（＝土・水）の排除によって顕現させられる時、それ（＝虚空）に関しても〈努力直後の観察〉が経験される。したがって「その時（＝〔発声等の〕努力直後）に観察されるから（JS 1.1.6）」と述べられた理由は不定である。

2.3. Kumārila による2通りの消滅の区分

まず (A) の箇所で、「その時（＝努力直後）に観察されるから（JS 1.1.6）」という音声の無常性に対する理由について、この想定対論者がもし

も仏教徒であるとするれば、3種の無為法が「努力直後に観察されるのに無常でないもの」という逸脱例になることを提示する (v. 21c-22b)。さらに〈択滅〉と〈非択滅〉とをそれぞれ「知を前提とする消滅」、「知でないものを前提とする消滅」と換言する (v. 22c-23b)。

消滅しないもの (<i>anāsin</i>)	択滅 = 知を前提とする消滅 (<i>buddhipūrvavināśa</i>)
	非択滅 = 知でないものを前提とする消滅 (* <i>abuddhipūrvavināśa</i>)
	虚空 cf. vv. 30c-31d

表1 vv. 21c-24b における3種の不滅な無為と〈択滅〉・〈非択滅〉の換言

続いて (B) の箇所では Kumārila による仏教説理解を展開する中で、消滅がそれ自体なぜ消滅せず永遠であるのかを根拠づける際に (vv. 24c-30b)、消滅を〈粗大消滅〉と〈微細消滅〉とに分類する。〈粗大消滅〉の実例として、槌の打撃などの直後に観察される壺の破壊などを挙げている。この中で、〈粗大消滅〉は「顕現させられる／観察される (*abhivyajyate, dṛṣṭa*)」、〈微細消滅〉は「観察されない (*anupalakṣita*)」と形容されていることから、ここでの〈粗大〉と〈微細〉の線引きの基準として観察可能性が考えられる。また、〈微細消滅〉を「刹那滅」とは明言していないが、「同質の連続体に付随する (*sadṛśasantānavṛtti*)」という表現は刹那滅を示唆すると考えられる。

本来的な消滅 (<i>[svābhāvika-]vināśa</i>)	観察不可能な〈微細消滅〉
	観察可能な〈粗大消滅〉 e.g. 槌の打撃の直後の“消滅”

表2 vv. 24c-30b における消滅の区分

ここで本稿の主題を改めて整理すると、譬喩表現でもなく、開悟の契機としての現象でもなく、直接的な表現として「壺の破壊」や「槌による破壊」のような物理起因的で観察可能な消滅それ自体を〈択滅〉とする見解の起点と伝承の追跡である。このことを念頭に、上記で訳出した Kumārila の理解がすでにこの解釈に与しているか、という点に焦点をあてて検討する。

Kumārila はまず (A) において〈択滅〉を〈知を前提とする消滅〉と規定する。この規定が、主述の交換が可能な等置的換言かどうかという点は明

らかではないが、暫定的にそのように読み取る。これを便宜的に解釈 X とする。

解釈 X : $\langle \text{択滅} \rangle \equiv \text{知を前提とする消滅}^{(14)}$

この解釈 X 自体は仏教的な伝統解釈、少なくとも『俱舍論』的な択滅理解を大きく逸脱するものではない。ただしその一方で、〈非択滅〉を〈知らざるものを前提とする消滅〉とする理解は、より重大な問題を孕んでいると思われるが、本稿では紙幅の都合〈択滅〉だけに焦点を絞る。

Kumāṛila は引き続き (B) において、全ての生成体 / 被造物 (*kṛtaka*) に消滅が本来的に備わっているという仏教説を紹介する中で消滅一般を〈微細消滅〉と〈粗大消滅〉とに分類する。そして、木片や壺などの生成体の消滅は、燃焼や打撃の瞬間にのみ存在するのではなく通時的に存在し続けているが、炭や欠片への変容を通じてその永遠な消滅が顕わとなり、ただ観察可能になると説明される。この説明の限り、Kumāṛila は〈択滅〉と〈粗大消滅〉という 2 つの集合の外延を等しいものとして等置しているとは限らない。しかし音声の無常性を帰結する推論式にとって〈択滅〉が逸脱例になるためには、永遠に存在しながら努力直後にだけ観察されている必要があり、何らかの意味で〈粗大消滅〉と判定されなければ議論の展開として不合理である。例えば〈択滅〉が「特定の条件が揃えば観察可能な消滅」という意味で〈[可能的な] 粗大消滅〉という集合に包含されるか、あるいは「時間的に延長する (= 持続的な) 同一の消滅が条件により観察可能であったり不可能であったりする」という意味で〈[ある特定時に実現した] 粗大消滅〉と〈[別の特定時に実現した] 微細消滅〉の両方にまたがるなど、何らかの意味で〈粗大消滅〉と判定される必要がある。

〈択滅〉が〈粗大消滅〉と〈微細消滅〉の区分に対していかに分類されるのかというこの点に関して、先に参照した Rāmānuja による仏教説理解では、〈択滅〉を槌による壺の破壊などの観察可能な〈粗大消滅〉としてほぼ定義的に説明している。これを解釈 Y とする。

解釈 Y : $\langle \text{択滅} \rangle \equiv \text{観察可能な} \langle \text{粗大消滅} \rangle$

次節で検討する Sucaritamīśra は、〈択滅〉を〈知を前提とする消滅〉と換言する Kumāṛila の解釈 X を受けた上で、さらに解釈 Y をも明言する。このことから、消滅を区分する 2 種の境界線、すなわち「知を前提とする消滅か否か」という境界と「観察可能な消滅か否か」という境界とを一致させ

る以下の解釈 Z が帰結することになる。

解釈 Z : 〈択滅〉 ≡ 知を前提とする消滅 ≡ 観察可能な〈粗大消滅〉

この解釈 Z の問題点は、「知を前提とする」の意味を、「観察可能」とほぼ同義とする点にある。本来、涅槃がなぜ〈択滅〉と呼ばれたかといえは「苦諦等の真理を感得する知によって獲得される特殊な離繫状態」だからである。その場合、「知を前提とする」とは「知という精神的現象を原因として存在論的に実現されること」を意味していたはずである。しかし上記の解釈 Z では、「知を前提とする」の意味が「知による存在論的な実現」というよりむしろ「知による認識論的な把握の可能性」へとすり寄せられていると考えられる。

話を ŚV に戻せば、Kumārila 自身の意図は消滅を区分する 2 種の境界線を一致させる解釈 Z だろうか。後に Sucaritamiśra が ŚV の目下の記述からおそらく読み取ったように、Kumārila の意図も解釈 Z であったというシナリオも可能だろう。その場合、解釈 X の中身は、例えば木片や壺などに本来的な消滅が変容体の認識を通じて間接的に観察可能になるように「条件が揃えば認識論的な把握が可能」という意味で〈択滅〉を「知を前提とする消滅」と換言したことになるだろう。

一方で、Kumārila が上記の 2 種の境界線を独立させていたというシナリオも十分に想定できる。つまり、〈択滅〉すなわち〈知を前提とする消滅〉が通時的に同一性を保ちながら、観察不可能な〈微細消滅〉と観察可能な〈粗大消滅〉の両方にまたがりうるという解釈である。この場合、「知を前提とする」の意味として「択によって存在論的に実現される」という『俱舍論』的な理解を維持することができる。といっても、滅尽の前にも〈択滅〉は既に存在していることになるので「実現される」というよりは「顕わになる」という方が正確であろうが。いずれにせよ、特殊な知により実現される〈択滅〉であれその他の種類の消滅であれ、全ての消滅は一般的に不生不滅であるが、単一で時間的に延長している各消滅が特殊な状況下で顕現すれば観察可能、さなければ観察不可能という理解である。

Kumārila の意図が解釈 Z か否かについて、この箇所だけから結論を出すことは難しい。解釈 Z をも許容する議論を展開するものの、Kumārila 自身の意図が解釈 Z 以外であった可能性も十分に考えられる。

3. Kumāṛila 以降の粗大消滅的釈滅理解

本節では、Kumāṛila 以降「槌による壺の破壊」など物理起因的で観察可能な消滅をも明らかに〈釈滅〉として解釈する用例として、Sucaritamīśra (10 世紀頃) による ŚV への註釈 *Ślokaṣvarttikakāśikā* (ŚVK) と、Kamalaśīla (8 世紀) の *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) の一節を確認する。

3.1. Sucaritamīśra

Sucaritamīśra は ŚV の音声論題に対する註釈の中、〈釈滅〉について 2 箇所而言及する。一箇所は先に提示した ŚV の一節に対する箇所であり、v. 22c-23b に対して以下のように註釈を加える。

では、この釈滅とは何であり非釈滅とは何か。[以上の反論を想定して Kumāṛila は]「知を前提とする (*buddhipūrva*-)」[云々]と述べている。

〈知を前提とする消滅〉(=釈滅)と〈知ならざるものを前提とする消滅〉(=非釈滅)に関する仏教徒にとっての解釈基準は順番に以下の通りである。すなわち、〈知を前提とする消滅〉とは槌の打撃などにより生じる粗大な消滅であり、全ての人によって知られうる。一方、生起が知られることのない諸事物の微細な消滅が〈知ならざるものを前提とする [消滅]〉であり、これは知を前提として生じることはない。⁽¹⁵⁾

Kumāṛila が〈釈滅〉を「知を前提とする消滅」と換言したことを受け、ここで Sucaritamīśra はさらに〈知を前提とする消滅〉を〈粗大消滅〉と説明し、その例として槌の打撃によって生じる消滅を提示している。さらに、同章後半で刹那滅批判が論じられる vv. 424-425⁽¹⁶⁾ に対する註釈では、以下のように〈知を前提とする消滅〉を〈粗大消滅〉の異名として明言している。

この意味は [以下の通りである]。仏教徒たちは、〈知を前提とする消滅〉という別名を持つ〈粗大消滅〉が [別様には] あり得ないことから、あらゆる一切のものについて、中間段階においても、微細な瞬間毎の消滅性 (= 消滅主体であること) を想定する。[しかし] 彼らですら、音声の消滅性の論証に対する能力はない。というのも、刹那的消滅性とは異なる粗大な消滅性が観察されないからである。⁽¹⁷⁾

以上のように Sucaritamīśra は、〈知を前提とする消滅〉すなわち〈択滅〉を〈粗大消滅〉と等置しており、明らかに解釈 Z の立場をとっている。

3.2. Kamalaśīla

Śāntarakṣita の *Tattvasaṃgraha* (TS) 第 24 章「天啓聖典の省察 (*śruti-parīkṣā*)」には、ŚV の音声論題章と並行する議論が多く見られる。そのうち〈択滅〉に関する議論として、TS vv. 2321-2330⁽¹⁸⁾が ŚVŚNA vv. 19-32b と強い並行関係を示している。この箇所では〈択滅〉を「知を前提とする消滅」とする Kumāṛila 由来の換言はそのまま TS の本文に採用される。その箇所に対する Kamalaśīla の註釈は〈粗大消滅〉という語を用いないものの、その実例として「壺などの消滅」を提示する。

仏教徒にとって択滅・非択滅・虚空という三種の無為なる実在は、利那的ではなく、作られておらず、永遠なものとして認められている。そして、これ（＝無為なる実在）にこの理由（＝〈努力直後の観察〉）が存在することを示すために“*buddhipūrvā*”云々と述べる。すなわち、知を前提とする壺などの消滅が〈択滅〉であり、一方、知でないものを前提とする〔消滅〕が〈非択滅〉である、という以上のことが仏教徒のパラダイム (*prakriyā*) だとされている。“*teṣām*”とは「壺などに関して」〔という意味である〕⁽¹⁹⁾。

上記引用末尾の箇所の TS v. 2323a の“*teṣām*”という代名詞に対する説明に着目したい。先の ŚV 本文 (v. 23a) では、この語は文脈からも「彼ら（＝仏教徒）にとって」という意味で解釈可能であったが、ŚVŚNA vv. 19-21 の 3 詩節分の内容が TS v. 2321 の 1 詩節に縮約される過程で、想定対論者の候補としてサーンキヤやヴァイシュエシカを挙げる部分が削除され、議論全体が仏教徒との対論に仕立てられ、また ŚV 本文にあった「仏教徒 (*śākyā*)」という語も現れない。このように「仏教徒」を指す先行句が消えたこともおそらくは要因となって、Kamalaśīla はこの代名詞“*teṣām*”を「壺などに関して」と換言したことが推察できる⁽²⁰⁾。

以上のようにミーマーンサーによる想定反論を構成する中で、対論者側による仏教説理解として〈択滅〉を説明する際、Kamalaśīla は〈択滅〉を〈粗大消滅〉とまでは明言しないものの、その実例として壺の破壊に言及している。

4. 結語にかえて

4. 1. 択滅理解の逸脱の程度に関する指標

伝統的には涅槃を意味していた〈択滅〉という仏教教義に固有の概念に関する一つの新解釈、すなわち〈択滅〉を観察可能な〈粗大消滅〉と等置する見解の伝承と起源の解明に向け、本稿ではその端緒として Kumāṛila, Kamalaśīla, Sucaritaśīra の議論に範囲を限定して検討した。

これらの文献における〈択滅〉の説明にはいくつかのパターンが確認される。まず Kumāṛila が明言するのは、〈択滅〉を定義的に〈知を前提とする消滅〉とする解釈 X である（指標 1）。「知を前提とする (*buddhipūrvā*)」の意味については解釈の許容幅があり、もしこれが「知により存在論的に実現される」という意味であれば『俱舍論』的解釈から逸脱するものではない。一方で Kamalaśīla と Sucaritaśīra の両者は Kumāṛila による解釈 X の文言を受容しているが、「知を前提とする」の意味をどのように解釈したかについては以下の点と連動していると思われる。それはすなわち、〈択滅〉を〈粗大消滅〉と等置しているか（解釈 Y）という点（指標 2）、そして槌による壺の破壊など物理起因的な消滅を〈択滅〉の実例として挙げているかという点であり（指標 3）、解釈 X に加えてこの 2 点が仏教的択滅理解からの逸脱の指標になると考えられる。とりわけ壺の破壊などを〈択滅〉の実例とする解釈は、伝統的仏教説からの明らかな逸脱といえるだろう。

Kumāṛila による仏教説理解が解釈 Y か否かに関して決定的な根拠はないが、「〈択滅〉であれ他の消滅であれ全ての消滅は同一性を保ちつつ時間的に延長し、条件次第で観察可能な時と観察不可能な時がある」という理解を読み取るのは妥当と思われる。その場合、必ずしも〈択滅〉が常に（＝涅槃／滅尽に先だってさえ）観察可能な〈粗大消滅〉というわけでもなく、逆に全ての〈粗大消滅〉が〈択滅〉というわけでもない。そしてその場合、木片の燃焼や壺の破壊という実例は〈粗大消滅〉の実例であって、〈択滅〉の実例ではないであろう。

Kamalaśīla は〈択滅〉の説明の際に、〈粗大消滅〉という語は用いていない。しかしその一方で、壺の消滅を〈択滅〉の実例としている。この実例を提示する背景には、註釈対象である TS が ŚV の本文を縮約して議論を再構成したことによる影響が推察できる。

Sucaritaśīra は、〈択滅〉を〈知を前提とする消滅〉と換言する Kumāṛila の言明を受けた上で、〈知を前提とする消滅〉を〈粗大消滅〉の異名として明言し、その実例として「槌の打撃などによる破壊」を提示している。した

がって、〈択滅〉を〈粗大消滅〉と等置しているといえる。

	〈知を前提とする消滅〉との 等置（解釈 X）	〈粗大消滅〉との 等置（解釈 Y）	択滅の実例
Kumārila	定義的特質として提示 （ŚVŚNA v. 22cd）	〈択滅〉は粗大 かつ微細な消滅（?）	木片・壺は粗大 消滅の例（?）
Kamalaśīla	ŚVŚNA v. 22cd （=TS v. 2322cd）を承認	言及なし	壺の破壊
Sucaritamīśra	ŚVŚNA v. 22cd を承認	異名として 等置を明言	槌の打撃による 破壊
Rāmānuja	—	定義的特質 として明言	槌の打撃による 破壊

表3 各思想家の3つの指標に関する言明と立場

4. 2. 択滅の新解釈の展開に関する仮説

本稿で扱った資料はきわめて限定的ではあるが、この断片的な情報を単純につなぎ合わせることで、以下の仮説を想定することができる。

Kumārila がもしも『俱舍論』ないしそれに準ずるような仏教文献における〈択滅〉の規定を参照し、「〈択滅〉とは特殊な知により存在論的に実現される特定の分離状態である」という原義を尊重していたとすれば、壺の破壊を〈択滅〉と判定したとは考えにくい。Kumārila が例示する木片の燃焼や壺の破壊といった消滅が、観察可能な〈粗大消滅〉の実例であって〈択滅〉の実例でないとすれば、〈択滅〉という概念・集合は〈粗大消滅〉に包含されていないことになる。むしろ、全ての消滅は観察可能性を備えているといえ、条件が揃わない限り観察されないという点で、場合により〈微細消滅〉とさえ判定されえよう。ただし ŚV の議論展開は、〈択滅〉を観察可能な〈粗大消滅〉としてのみ見なすような解釈 Z を誘発するだけの曖昧さを備えていると評価できる。

この方向の解釈を促したもう一つの要因が TS における ŚV 本文のアレンジである。この縮約的改変により先行詞を失った代名詞を「壺など」と註釈した Kamalaśīla が、本稿で検討した資料の限り、物理起因的消滅を〈択滅〉の実例として明言する初出となる。Kamalaśīla 自身がこの解釈を良しとしていたとは想定しにくい、しかしながら目下の文脈がミーマーンサーによる仏教理解を紹介する箇所であることを考慮すれば、その想定対論者が仏教

説を誤解していたとしても——もしこれが立論者 Kamalaśīla の誤解に起因するとすれば文献学的誠実性を欠くとはいえ——自説を優位に論書を構築するにあたって大きな障害とはならない。この点も粗大消滅的解釈を後押しした一因として想定できる。

この方向の解釈は Sucaritamīśra による ŚV の註釈においてさらに進化したと考えられ、ŚVK において〈択滅〉を〈粗大消滅〉と同置する解釈 Z が明らかに確認できる。

4. 3. 今後の課題

本論考では、〈択滅〉の粗大消滅的新解釈の伝播を主題とし、とりわけ ŚV の一節とそれを援用・註釈する後代の文献に限定して、その新解釈の発展に関する仮説を提示した。紙幅と時間の制約のため他の資料を網羅的に精査することも適わず、また〈非択滅〉については極力捨象せざるを得なかった。特に後者の点について、〈択滅〉と〈非択滅〉という両概念を対比的かつ総合的に改めて検討する必要があるだろう。

例えば Bhāskara は、〈択滅〉と〈非択滅〉をそれぞれ〈原因を持つ消滅〉及び〈原因を持たない消滅〉と説明し「有因か無因か」という別の切り口で対比的に論じるなど⁽²¹⁾、本稿で扱った解釈とはまた異なる観点からの説明も確認される。また、上記の暫定的仮説では Kumāṛila が『俱舍論』ないしそれに準ずる仏教文献を参照したという仮定に則っているが、この点についても仏教内部の多様な見解と摺り合わせながら、Kumāṛila が参照した文献を比定していく作業が必要だろう。これらの点を視野に入れた〈択滅〉・〈非択滅〉の解釈史をめぐる総合的な研究については今後の課題としたい。

Bibliography

1 次資料（略号とテキスト）

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya*, P. Pradhan (ed.), K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.
- TS *Tattvasamgraha* of Śāntarakṣita with the commentary *Pañjikā*, S. D. Shastri (ed.), Bauddha-bharati Series 1 (2 vols.), Varanasi, 1968.
- TSP *Tattvasamgrahapañjikā* of Kamalaśīla.
- (E_B) See TS.
- (J) Jinabhadrasuri Tadapatriya Grantha Bhandara No. 378., 313

- fols.
- (T_D) *sDe dge Tibetan Tripiṭaka, Bstan ḥgyur — preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo.* ed. by J. Takasaki, Z. Yamaguchi, and Y. Ejima, Sekai Seiten Kankō Kyōkai, Tokyo, 1977ff. No. 4267, ze 133b– 'e 363a.
- (T_P) *The Tibetan Tripitaka. Peking Edition. Reprinted under the Supervision of the Otani University, Kyoto.* ed. by D. T. Suzuki. Tibetan Tripitaka Research Institute, Tokyo-Kyoto, 1955–1961. No. 5764, 'e 159– ye 405a.
- BS *Brahmasūtra* of Bādarāyaṇa, with a commentary *Śāṅkara Bhāṣya* and sub-commentaries *Bhāmatī*, *Kalpataru*, and *Parimala*, Anantkr̥ṣṇa Śāstrī (*ed.*), Nirṇaya Sāgar Press, Bombay, 1938 (2nd ed.).
- BSBhBh Bhāskara's *Bhāṣya* on BS, Vindhyesvarī Prasāda Dvivedin (*ed.*), Chowkhamba Sanskrit Series, no. 20, Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi, 1991.
- BSŚBh Śāṅkara's *Bhāṣya* (*Śāṅkarabhāṣya*) on BS, see BS.
- BSRBh Śrībhāṣya of Rāmānuja, Vasudev Shastri Abhyankar (*ed.*), 2 vols., Government Central Press, Bonbay, 1914.
- ŚV *Ślokavārttika* of Kumārila Bhaṭṭa.
- (E_C) *Ślokavārttika* with a commentary *Ślokavārttikanyāyaratnākara* of Pārthasārathi, Rāmaśāstri Tailanga (*ed.*), Chowkhamba Sanskrit Series Office, Benares, 1898–1899.
- (O) Bodleian Library of Oxford University, No.520A (Wilson 325), Paper, Devanagari.
- (B₁) India Office of British Library, No. 1449b (2149), 139 fols, Devanagari, the 50th leaf is wanting.
- (B₂) India Office of British Library, No. 3739 (7976), 89 fols. European paper (watermarked Smih & Meynier), bound in book form, Devanagari, written in A. D. 1857.
- ŚVK *Ślokavārttikakāśikā* of Sucaritamīśra.
- (K₁) Oriental Research Institute & Manuscript Library (ORI), University of Kerala, C.O.L. No. 1333, Palm Leaf, Malayalam script, covering from *sphoṭavāda* to *vedādhikaraṇa*.

- (K₂) ORI, University of Kerala, C.O.L. No. 1779A, Palm Leaf, Malayalam script, 123 leaves, covering from *vanavāda* v. 65 to *vedādhikaraṇa*.
- (G) Government Oriental Manuscripts Library (GOML), Madras University, S. R. 1739 (R. 3610), Palm Leaf, Malayalam script, 311 leaves.
- (S) Sarasvati Bhavan Library, Varanasi, No. 29032, Paper, Devanagari.
- (T_A) Transcript, Adyar Library, Chennai, TR 66-7, No. TR 63361, Paper, Devanagari.
- (T_C) Transcript, GOML, Chennai, R. 3778, S. R. 2126, Paper, Devanagari.
- (T_K) Transcript, ORI, Kerala University, misplaced, likely that the catalogue number of this transcript is No. 337 in the handwritten catalogue, Paper, Devanagari.
- ŚVŚ Śārikā of Jayamiśra, Sarasvati Bhavan Library, No. 93591, Paper, Devanagari.
- T 『大正新脩大藏經』
- 『成実論』 訶梨跋摩造鳩摩羅什訳『成實論』, T32, pp. 239–373.

2 次資料

IKEDA, Rentarō (池田 練太郎)

- [1988] 「<無為>説の起源について」, 『仏教学』 25, pp. (1)–(19).

ISSHIKI, Daigo (一色 大悟)

- [2009] 「有部アビダルマ文献における無為法の実有論証について」, 『インド哲学仏教学研究』 16, pp. 39–54.

KATAOKA, Kei (片岡 啓)

- [2007] “A Critical Edition of *Śābarabhāṣya* ad 1.1.6–23: *Śabdanityatvādhikaraṇa*,” 『東洋文化研究所紀要』 152, pp. (29)–(79).

MINOURA, Akio (箕浦 暁雄)

- [2002] 「釈滅について」, 『印度學佛教學研究』 50–2, pp. (140)–(143).

MIYASHITA, Seiki (宮下 晴輝)

- [1989] 「非釈滅無為」, 『佛教学セミナー』 49, pp. 45–62.

MIZUNO, Kōgen (水野 弘元)

[1962] 「無為法について」, 『印度學佛教學研究』 10-1, pp. 1-11.

NAKAMURA, Hajime (中村 元)

[1951] インド哲學思想 第二卷『ブラフマ・スートラの哲學』, 岩波書店, 東京.

OGAWA, Hiroshi (小川 宏)

[1979] 「無為法について ——特に非摂滅思想の淵源とその発達——」, 『印度學佛教學研究』 27-2, pp. 219-221.

SAKURABE, Hajime (櫻部 建)

[1969] インド哲學思想 第二卷『俱舎論の研究 界・根品』, 法藏館, 京都.

SHĪNA, Rokurō (椎名 六郎)

[1921] 「無為法の観念」, 『仏教研究』 2-1, pp. 82-119.

TASAKI, Kunihiko (田崎 國彦)

[1987] 「経量部の摂滅説 (一) ——その定義と安慧満増の解釈をめぐって——」, 『印度學佛教學研究』 35-2, pp. 54-56.

YOKOYAMA, Takeshi (横山 剛)

[2013] “The Real Existence of *Pratisaṃkhyānirodha*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 61-3, pp. (110)– (114).

注

* 本稿は「第26回西日本インド学仏教学会」(2015年7月25日、広島大学)及び「中世インドの刹那滅論争史研究会」(2015年8月24日、信州大学)における発表を原稿にしたものである。これらの学会、研究会において、小川英世先生、片岡啓先生、根本裕史先生、護山真也先生他に貴重な意見を賜った。その他、一色大悟氏(東京大学大学院)にはアビダルマ教学における無為法や摂滅に関するコメントを、また陶怡君氏(筑波大学大学院)には漢文資料の情報を教示いただいた。この場で深謝申し上げる。当然ながら本論文中にありうべき誤りはすべて著者の責任である。

(1) Cf. 椎名 [1921], 水野 [1962], 小川 [1979], 池田 [1988], 宮下 [1989], 箕浦 [2002], 田崎 [2002], 一色 [2009], YOKOYAMA [2013].

(2) Cf. 『成実論』T32.369a3-9, 一色 [2009: p. 51, n. 41].

(3) Cf. 『景德傳燈録』T51.284a9-11.

(4) あるいは「知を前提としない消滅」という解釈の可能性もある。

(5) AKBh p. 4.1-2: *yaḥ sāśravair dharmair viśaṃyogaḥ sa pratisaṃkhyānirodhaḥ. duḥkhādānām āryasatyānām pratisaṃkhyānam pratisaṃkhyā pratijñāviśeṣas tena prāpyo nirodhaḥ.*

(6) *ibid.* ll. 11-12: *anāgatānām dharmānām utpādasyātyantavighnabhūto viśaṃyogād yo*

'*nyo nirodhaḥ so 'pratisamkhyānirodhaḥ*.

(7) 中村 [1951: pp. 375ff.] は *Brahmasūtra* に対する 3 つの註釈を比較検討し、Rāmānuja の BSRBh については「思想的にはスートラに近いであらうが、スートラの字句の註解としては、シャンカラ及びバースカラのそれよりも劣つたものであり、傳統的註解が後世の諸學者によつてしばしば變改せられた結果としての解釋を記してゐるといはねばならぬ」と論じる (*ibid.* pp. 387–388)。特に、〈要素集合 (*samudāya*)〉、〈十二因縁〉、〈三無為〉等の仏教術語については、Rāmānuja には「相当の誤解」があり「仏教を論駁するに当たって肯綮を失した議論を述べている」と評価する。

(8) 〈非継続的な消滅〉という表現は複数の文献に確認されるが、たとえば Kamalaśīla はこのタイプの消滅を「完全な消滅」(*ātyantikam nāśitvaṃ*) と換言し、これに対比されるタイプとして、未顕現などの状態へ遷移することでたとえ観察不可能になつても、能力や微細な本体などが継続的に残存するタイプの消滅を提示する (cf. TSP ad TS vv. 2314–2315.)。粗大な消滅の場合、例えば壺は槌の打撃により諸々の欠片へと姿を変えつつも質料の点で「継続的」であるが、瞬間毎の微細な消滅の場合、諸存在は一旦完全に消滅し、似て非なる全く新しいものの生起 (**apūrvotpāda*) があるという点で「非継続的」と呼ばれていると考えられる。上記の翻訳では、〈微細な消滅〉だけを形容するものとしてこの語を理解した。

(9) BSRBh ad BS 2.2.21, vol. 1 p. 487, 12–16: *kṣaṇikatvavādidbhir mudgarābhighātādy-anantarabhāvitayopalabdhivyogyaḥ sadṛśasantānāvasānarūpaḥ sthūlo yaḥ sadṛśasantāne pratikṣaṇabhāvē copalabdhyanarhaḥ sūkṣmaś ca yo niranvayo vināśaḥ pratisamkhyā-pratisamkhyānirodhasadbādhyaṃ abhidhīyate tau na sambhavata ity arthaḥ*.

Cf. Śāṅkara's *Bhāṣya* ad BS 2.2.21, p. 533, 8–9: *buddhipūrvakaḥ kila vināśo bhāvānām pratisamkhyānirodho nāma bhāṣyate, tadviparīto 'pratisamkhyānirodhaḥ*; Bhāṣkara's *Bhāṣya* ad BS 2.2.21, p. 120, 25–26: *bhāvāhetuko vināśaḥ pratisamkhyānirodha ity ucyate. sūkṣmaḥ svābhāviko 'nimittako vināśo 'pratisamkhyānirodhaḥ*.

(10) Cf. KATAOKA [2007: (44)–(45)].

(11) *anāikāntikatā tāvad dhetūnām iha kathyate / prayatnānantarā dṛṣṭir nitye 'pi na viruddhyate //19// tasmāt tatraiva dṛṣṭatvād anyatrādṛṣṭakalpanā / prāgūrdhvānupalabdhī ced dhetutvena¹ vivakṣite //20// jātyaulūkyasya sāmukhyasya caitanyenātmapartinā / śākyasyāpi tv anāikāntaḥ² kṣaṇikavyatirekibhiḥ //21// pratisamkhyāpratisamkhyā-nirodhavyomabhis³ tribhiḥ / buddhipūrvavināśe⁴ hi⁵ pratisamkhyānirodhadhiḥ⁶ //22// abuddhipūrvakas teṣāṃ nirodho 'pratisamkhyayā / tau ca dvāv apy anāśitvād⁷ iṣṭāv akṛtakāv api //23// āhuḥ svabhāvasiddham hi te vināśam ahetukam /*

¹ *ced dhetutvena*] E_COB₂; *ca hetutvena* B₁ ² *tv anai-*] E_CB₁B₂; *cānai-* O ³ *pratisamkhyāpratisamkhyā-*] E_CB₁B₂; *pratisamkhyāpratisamkhyā-* O ⁴ *buddhipūrvavināśe*] B₁B₂; *buddhipūrvapūrvam vināśe* E_CO ⁵ *hi*] E_COB₁⁶B₂; *pi B⁶*; cf. ŚVŚ “hi” ⁶ *pratisamkhyāni-*] E_COB₂; *pratisamkhyāni-* B₁ ⁷ *apy anāśitvād*] E_COB₁; *avināśitvād* B₂

(12) *hetur yasya vināśo 'pi tasya dṛṣṭo 'nikurādivat //24// vināśasya vināśas tu¹ nāsti tasmād akṛtrimah / bhavati hy agnisambandhāt² kṣṣṭād āṅgārasantatiḥ //25// mudgarābhihātāc³ cāpi kapālaṃ jāyate ghaṭāt / svābhāviko vināśas tu jātamātrapratīṣṭhitah //26// sūkṣmaḥ sadṛśasantānavṛtter anupalakṣitah / yadā vilakṣaṇo hetuḥ patet sadṛśasantatau //27// vilakṣaṇena kāryeṇa sthūlo 'bhīvyajyate tadā / tenāsadṛśasantāno⁴ hetoḥ sañjāyate yataḥ⁵ //28// tenaivākriyamāno⁶ 'pi nāśo 'bhīvyajyate sphuṭah / sa mudgara-prahārādīprayatnānantarīyakaḥ⁷ //29// yasmād akṛtako dṛṣṭo hetuḥ syād vyabhicāry atah /*

¹ *vināśasya vināśas tu*] E_CB₁B₂; *vināśas tu vināśasya* O; cf. ŚVŚ “vināśasya vināśas tu”

² *agnisambandhāt*] E_COB₁; *agnisambaddhāt* B₂; cf. ŚVŚ “agnisamparkāt” ³ *mudgarābhihātāc*] OB₂; *mudgarādihātāc* E_C; *mudgarā[?]i[?]hātāc* B₁; cf. ŚVŚ “mudgarābhihātāc” ⁴ *tenāsadṛśa-*

santāno] E_COB₂: te[nā]sadṛ[?][santāno B₁ ⁵ yataḥ] E_CB₁B₂: tataḥ O ⁶ tenaivākriyamāno]
E_COB₂: tenaiva kriyamāno B₁ ⁷ mudgaraprahārā-] E_COB₁: mudgara[pra]hārā- B₂: cf. ŚVŚ
"mudgarābhigātā-"

- (13) ākāśam api nityam sad yadā bhūmijalāvṛtam //30// vyajyate tadapohena
khananotsecanādibhiḥ / prayatnānantaram jñānam¹ tadā tatrāpi dṛśyate //31//
tenānaikāntiko hetur yad uktam tatra darśanā²/

¹ -taram jñānam] E_COB₁: -tarajñānam B₂ ² tatra darśanāt] E_COB₁B₂: cf. ŚVŚ "tatra
darśanam"

- (14) 以下、「≡」という記号を「集合同士の外延が等しい」あるいは「必要十分の関係」
の意味で使用する。また2つの集合や概念同士がこの関係にあると見なすことを意味して、
「等置する」という表現を用いる。

- (15) kaḥ punar ayaṁ¹ pratisaṁkhyānirodhaḥ kaś cāpratisaṁkhyānirodhaḥ,² ata āha³ --
buddhipūrveti. pariḥhāṣeyaṁ śākyānām yathākramam buddhipūrvābuddhipūrvavināśayoḥ⁴
-- buddhipūrvaś ca vināśo yo 'yaṁ⁵* mudgaraprahārādīnā janyate⁶ sa sthūlo vināśaḥ
sarvajanaavedyaḥ,⁷ sūkṣmaś tv ajñātajanmā⁸ bhāvānām nirodho⁹ 'buddhipūrvakaḥ,¹⁰ nāsau
buddhipūrveṇa¹¹ janyata iti.[†]

¹ punar ayaṁ] K₂GK₁T_CT_AT_K: punaḥ S ² kaś cāpratisaṁkhyānirodhaḥ] K₂G^PK₁ST_AT_K: kaś cāpy
atisaṁkhyānirodhaḥ T_CT_A: om. G^{or} ³ āha] K₂GK₁^{or}ST_AT_K: āhe K₁^{or} ⁴ buddhipūrvābuddhipūrvavi^{or}]
K₂GK₁^{or}ST_C: buddhipūrvābuddhipūrvāvi^{or} K₁^{or}: buddhipūrvā buddhipūrvavi^{or} T_AT_K ⁵ yaṁ]
GK₁T_CT_AT_K: om. S ⁶ janyate] GK₁T_CT_AT_K: ghaṭādīnām janyate S ⁷ sarvajanaavedyaḥ] S:
sarvajanasvasaṁvedyaḥ K₁^{or}T_CT_AT_K: sarvajanassvasaṁvedyaḥ G: [sa]svasaṁvedyaḥ K₁^{or}:
sarvajanasusaṁvedyaḥ conj. ⁸ ajñātajanmā] K₂GT_C^{or}: ajñānajanmā K₁T_K: ajñātajanmā T_C^{or}T_A:
ajñānajanmo S ⁹ nirodho] K₂GK₁ST_CT_K: virodho T_A ¹⁰ 'buddhipūrvakaḥ] GK₁T_CT_AT_K: [bu]ddhi-
pūrvakaḥ K₂: buddhipūrvō S^{or}: buddhipūrvō S^{or} ¹¹ buddhipūrveṇa janyata] GK₁^{or}T_CT_AT_K: buddhi-
pūrveṇa janyate] K₂: buddhipūṇa janyata K₁^{or}: buddhipūrvam kenacijjanyata S * vināśo yo
'yaṁ ... sūkṣma^{or}] lac. K₂ [†] iti] lac. K₂

- (16) Cf. ŚVŚNA vv. 424–425: ye 'pi sthūlavināśānām anyathānupapattitāḥ¹/ kalpayanty
antarā sūkṣmam vināśitvam pratikṣaṇam//424// te 'pi kṣaṇikanāśitvād adhikām
sthūlanāśitām/ śabdānām² avijñānanto na śaktā nāśisādhane³//425//

¹ -pattitāḥ] E_COB₁: -pattitāḥ] B₂ ² -nām ...] OB₁E_C: om. B₂ (f. 79b–80a is missing) ³
nāśi-] E_CB₁: nāśa- O

「ある人たち（＝刹那滅論者）は、粗大な消滅が別様には説明がつかないことから、[生起
から粗大消滅の] 中間に〈消滅性〉を刹那毎に細かく（[†]sūkṣmam）想定する。しかし彼
らにとっても、音声に関しては、刹那的な消滅性とは異なる粗大な消滅性を認識している
わけではないので、[音声の] 消滅を論証することはできない。」

[†] v. 424c の 'sūkṣmam' は形容詞か副詞か。形容詞の場合〈消滅[主体]性(vināśitva)〉の限定
句と考えられるが、その場合〈消滅(nāśa)〉という行為名詞ではなく抽象概念を限定している点
で不自然である。複合語の前分だけを限定する sāpekṣasamāsa だとすると、消滅主体(vināśin)
である壺などが微細なことになってしまう。テキストの最小の変更として鼻音記号を取り除くこ
とで'sūkṣmavināśitvam'とし、'sūkṣmavināśa-'という複合語に所有接辞が付加したと解釈すれば、
形容詞でありながら直接的に〈消滅〉自体の限定句となりうる。一方で副詞の場合、'kalpayanti'
の現定句となり「〈消滅[主体]性〉を刹那毎に細かく想定する」という意味も可能であろう。

Sucaritamīśra はこの箇所に対する逐次註の直後に'sūkṣmavināśa-'という複合語を用いるものの、
目下の箇所の逐次註においては、語順を'sūkṣmam pratikṣaṇam vināśitvam'として換言した上で
註釈を加えていることから、少なくとも Sucaritamīśra が参照した ŚV 本文は鼻音記号付であった
ことが推測される。

- (17) asyārthaḥ¹ -- ye² bauddhā buddhipūrvavināśāparanāmādheyasthūlavināśānupapattyā

sarvabhāvānām eva madhye 'pi sūkṣmaṃ pratikṣaṇaṃ³ vināśitvaṃ kalpayanti, te 'pi na śabdasya nāśitvasādhane samarthāḥ, kṣaṇikanāśitvād adhikāyāḥ⁴ sthūlanāśitāyā adarśanāt.

¹ *asyārthaḥ*] ST_CT_A: om. T_K ² *ye*] T_CT_A: *ye* 'pi ST_K ³ *pratikṣaṇaṃ vināśitvaṃ*] T_CT_AT_K: *pratikṣaṇavināśitvaṃ* S ⁴ *°dhikāyāḥ*] ST_K: *°dhikāyā* T_CT_A

(18) Cf. *Tattvasaṃgraha* vv. 2321-2324b: *prayatnānantaraṃ jñānaṃ kṛtakānityasāadhanam / yat tatpāpy asty anekāntaḥ kṣaṇikavyatirekibhiḥ // pratisaṅkhyāpratisaṅkhyānirodhavyomabhis tribhiḥ / buddhipūrvavināśo hi pratisaṅkhyānirodhadhīḥ // abuddhipūrvakas teṣāṃ nirodho 'pratisaṅkhyayā / lau ca dvāv apy anāśitvād iṣṭāv akṛtakāu api // āhuḥ svabhāvasiddham hi te vināśam ahetukam /*

「〈努力直後の認識〉は、被造性と無常性の論証因であるが、それに対しても利那的でない
 択滅・非択滅・虚空という3種による不定がある。というのも、それら（＝壺など？ cf.
 TSP）に関して、〈知を前提とする消滅〉に対して「択滅」であるとの理解があり、〈知で
 ないものを前提とする消滅〉は「非択」による。そして、この両者（＝択滅・非択滅）とも、
 〈消滅しないもの〉（*anāśin*）なので、〈作られていないもの〉としても認められるからで
 ある。というのも、彼ら（＝仏教徒 cf. TSP）は「自性として成立する消滅は原因を持た
 ない」と述べているからである。」

(19) *Tattvasaṃgrahaṇajikā* ad *Tattvasaṃgraha* vv. 2321-2323, (E_B) pp. 778.3b-779.2: ...
tathā hi -- bauddhaiḥ pratisaṅkhyānirodho 'pratisaṅkhyānirodha¹ ākāṣaṃ ceti trividham
asaṃskṛtaṃ vastu kṣaṇikavyatiriktaṃ akṛtakam² nityaṃ eṣaṃ, tatra cāsyā hetor vṛttir iti
darśayann āha -- buddhipūrvetyādi. yo buddhipūrvō ghaṭādīnāṃ vināśaḥ sa
pratisaṅkhyānirodhaḥ, yas tv abuddhipūrvāḥ so 'pratisaṅkhyānirodhaḥ -- ity eṣa kila
bauddhaḥ prakriyā. teṣāṃ iti ghaṭādīnāṃ. ...

¹ *'pratisaṅkhyānirodha*] E_BJ; om. T_DT_P ² *akṛtakam*] em. (cf. T_DT_P: *ma byas pa*);
akṣaṇikaṃ E_BJ

(20) ただし、TS v. 2424b (ŚVŚNA v. 24b) の“*te*”に対しては、Kamalaśīla は「仏教徒」と
 という註釈を与えている。TSP p. 779.6: *ta iti bauddhāḥ*.

(21) 本稿脚註 (9) 参照。

（本研究は 2015 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手
 研究（B））26770022 による研究成果の一部である。）

（しだ・たいせい 筑波大学）